修士論文
2020 年 7 月

認知症の人との対面経験の心理的受け止め方と認知症のスティグマとの関係性

指導　野村　知子　教授

心理学研究科
健康心理学専攻
218J4951
顧　徐

Master's Thesis
July 2020

Relationship between psychological perception of contact experience with people with dementia and stigma of dementia

Xu Gu
218J4951
Master's Program in Health Psychology
Graduate School of Psychology
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Tomoko Nomura

目录

序章 1
第１章 研究の背景 2
1.1　認知症の現状 2
1.2　認知症スティグマの背景 2
1.3　認知症スティグマの現状 3
1.4　認知症スティグマとの関連要因 4
第２章 研究目的 5
2.1　研究 1：対面経験の有無と認知症スティグマの関係性の検証 5
2.2　研究 2：対面経験を測る尺度の開発 5
2.3　研究 3：対面経験の心理的受け止め方と認知症のスティグマとの関係性を見る 5
第３章 研究方法 6
3.1　調査方法 6
3.2　倫理的配慮 6
3.3　調査内容 7
3.4　分析方法 8
3.4.1　研究 1：対面経験の有無と認知症スティグマの関係性 8
3.4.2　研究 2：対面経験を測る尺度の開発 8
3.4.3　研究 3：対面経験の心理的受け止め方と認知症のスティグマとの関係性を見る 9
3.4.4　研究 4：自由回答から得る知見 9
第４章 結果 10
4.1　基本属性 10
4.2　研究 1：対面経験の有無と認知症スティグマの関係性の検証 12
4.3　研究 2：対面経験を測る尺度の開発 12
4.4　研究 3：対面経験の心理的受け止め方と認知症のスティグマとの関係性を見る 14
4.5　研究 4：自由回答から得る知見 18
第５章 考察 30
5.3 対面経験を測る尺度の開発 30
5.4 対面経験の心理的受け止め方と認知症のスティグマとの関係性 31
5.5 自由回答から得た知見 31
5.6 本研究から得られた示唆 32
5.7 限界と課題 33
参考文献 I
資料 ..... - 1 -

序章

日本の高齢化は進行し、2015 年時点では高齢化率（65 歳以上人口割合）は 26.7%に達した。予測によると、2060 年では高齢化率が 39.9%となる（厚生労働省：2016）。認知症の有病率も上がっている。

しかし、認知症スティグマ（偏見）は依然として多く存在する。工藤（2017）の研究では「メディアに登場する認知症に関する観方について、全体の傾向として、否定的な評価は 9 割、3 割弱が肯定的評価を行っており、一般市民が認知症に関する観方について、全体として、ほぼ全員が否定的な認識をもっている」と報告している。

さらに、認知症スティグマとの関連要因が先行研究の中で幾つかが示されている。しかし、今までの研究では対面経験に関する有無までしか調査されておらず、それらの心理的受け止め方まで深めた調査はなされていない。どのような対面経験の心理的受け止め方がスティグマに影響を及ぼすかを明らかにすることが、今後のスティグマ低減施策のヒントになるものと思われる。

第 1 章　研究の背景

第 2 章　研究目的

第 3 章　研究方法

3.1　調査方法

本研究は、スノーボールサンプリング法を用いて、次のような 2 つの方法で記式質問紙調査を行い、合計 415 の回答をえた。調査協力の承諾を得られた福祉施設とボランティア団体の構成員を対象とした。

3.3　調査内容

対象者の特徴として、年齢、性別、対面経験の有無で構成されている。対面経験がありと回答した対象者に、合う立場、合う人数、合う回数、最後に合う時間、身体的負担、精神的負担について調査した。

また、全対象者に「認知症スティグマ」「認知症の症状及び介護の知識」「高齢者イメージ」を調査した。さらに、対面経験がありと回答した対象者だけに「認知症との対面経験を測る尺度」を調査した。

3.4　分析方法

3.4.1　研究 1：対面経験の有無と認知症スティグマの関係性

対面経験が「あり」と「なし」と「認知症スティグマ」の 4 因子と相関分析を行った。

3.4.2　研究 2：対面経験を測る尺度の開発

対面経験 29 項目の因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。

3.4.3　研究 3：対面経験の心理的受け止め方と認知症のスティグマとの関係性を見る

step1 身体的負担、精神的負担と「認知症の症状及び介護の知識」を統制変数にし、step2 身体的負担、精神的負担と「認知症の症状及び介護の知識」の上に「対面経験を測る尺度」の因子を説明変数として、2step を設定した上で階層的重回帰分析を行った。

3.4.4　研究 4：自由回答から得る知見

マトリックス分析と KJ 法を使用して、質的分析を行った。

第4章　結果

4.1　基本属性

4.2　研究 1：対面経験の有無と認知症スティグマの関係性の検証

対面経験の有無が「人間性イメージ」（r＝0.321、p<0.01）「排除」（r＝-0.338、p<0.01）「行動イメージ」（r＝-0.193、p<0.01）「自己」（r＝0.133、p<0.01）の 4 因子において、有意な関連性が見られた。

4.3　研究 2：対面経験を測る尺度の開発

スクリープロットを行った結果、三因子が妥当と判断した上で、対面経験 29 項目の因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。その際、項目 6 の因子負荷量が 0.40 未満ので除外し、再度分析後、全項目の因子負荷量が 0.40 以上となったが、三因子それぞれ因子負荷量の上位 6 項目を取り上げて、三回目の分析をした。さらに、因子内の項目のクロンバックのα係数を算出し、内的一貫性について確認した。

「肯定的回想」「再評価傾向」「否定的回想」各因子間の相関係数は、0.118、0.248、0.557 であった。また、因子構成する項目におけるα係数は第 1 因子 0.915、第 2 因子 0.866、第 3 因子 0.876 であった。

4.4　研究 3：対面経験の心理的受け止め方と認知症のスティグマとの関係性を見る

人間性イメージにおいて、Step1 で症状知識、介護知識精神的負担の主効果が有意であった。Step2 でΔR2 が有意であった、肯定的回想と再評価傾向の主効果が有意であった。

排除において、Step1 で回症状知識、介護知識、精神的負担の主効果が有意であった。Step2 で、ΔR2 が有意であった肯定的回想と再評価傾向の主効果が有意であった。

行動イメージにおいて、Step1 で症状知識、介護知識、身体的負担、精神的負担の主効果が有意であった。Step2 で、ΔR2 が有意ではなかった、対面経験の心理的受け止め方の主効果は見られなかった。

自己において、Step1 で、精神的負担の主効果に有意傾向が見られた。Step2 で、肯定的回想と否定的回想の主効果が有意であった。

4.5　研究 4：自由回答から得る知見

問 8 ではマトリックス分析を使用して、続柄によって、似たような回答をグループに分けた。

問 9 では、71.6%（257/359）という多くの回答者から回答が寄せられた。「認知症の方への周囲の対応」について、KJ 法を用いて分析を行い、カテゴリー化した。

第 5 章　考察

認知症スティグマを軽減するため、症状と介護知識を得ること、身体的負担、精神的負担の解消、認知症の人との対面経験を得ることが有効であると考えられる。福祉施設の職員やボランティア団体の構成員などの対象者は認知症の人との関わりと知識を多く持つから、認知症の人との対面経験を否定的に感じない傾向があった。よって、認知症の人との関わりと知識を一定の水準に足すと、認知症の人との対面経験を否定的に感じなくなる。

また、認知症スティグマは多様な分野があるから、それぞれの分野に関わるものは違うことを次のように示した。①認知症のある人の人間性についてのイメージでは、認知症の介護及び症状知識、精神的負担、対面経験の肯定的回想と有意な関連性がみられた。②認知症のある人との関わりを避ける行為である「排除」では、症状知識、精神的負担、肯定的回想、再評価傾向と有意な関連性がみられた。③認知症の人の行動についての印象である「行動イメージ」では、介護知識、症状知識、身体的負担、精神的負担と有意な関連性がみられた。④「もし自分が認知症になったら」という仮定において、自分自身に関わる見方である「自己」では、肯定的回想、否定的回想と有意な関連性がみられた。

続柄や経歴などの違いはスティグマと大きく関わっていることが推測されたので、個々の人の認知症の人との体験や続柄にも目を向く必要がある。前述したように、各々のステージでの理解に役立つ、情報や本人とのかかわり方を自由回答は示してくれた。これは、アンケートの対象者が認知症の人の差別を減らし、いかに認知症の人にとっても住みやすいまちをつくり出していくかに先進的に働きかけている人が大勢参加した結果である。未来の姿をも示してくれたアンケート参加者に感謝する次第である。

参考文献

石附敬・阿部哲也(2017)「認知症スティグマの低減に資する要因群の探索－大学生を対象にした施行調査を基に－」東北福祉大学研究紀要,第 41 巻,pp.133-143

大島巌(1989)「日常的な接触体験を有する一般住民の精神障害者観-開放的な処遇をする一精神病院の周辺住民調査から-」社会精神医学 12,pp.286-297

小笠原浩一(2017)「認知症早期発見の促進に効果のあるスティグマ低減手法の開発 ： 調査仮説と調査設計」東北福祉大学研究紀要,第 41 巻, pp.93-132

藤田和子(2017)「認知症になってもだいじょうぶ！」徳間書店

片山 禎夫監修(2014)「認知症の診断と治療に関するアンケート調査　調査報告書」 http://www.alzheimer.or.jp/webfile/shindantochiryo_tyosahoukoku_2014.pdf (2020 年 7 月 2 日現在)

金高闇(2010)「認知症の人に対する態度に関する研究 ： 認知症の人に対する態度尺度の開発を通して」大阪府立大学博士論文,pp.1-132

金高闇・黒田研二(2012)「認知症の人に対する介護職員の態度とその関連要因」社会問題研究・第 61 巻,pp.101-112

久保昌昭・岡本直子・谷野秀夫ら(2008)「認知症のある人との関わり度から見た地域住民への効果的な啓発活動のための分析」日本認知症ケア学会 7,pp.43-50

工藤健一(2017)「介護職員からみた認知症スティグマの分析」東北福祉大学研究紀要,第 41 巻,pp.145-159

クリスティーン・ブライデン(2017)「私の記憶が確かなうちに」クリエイツかもがわ

厚生労働省(2004)「「痴呆」に替わる用語に関する検討会報告書」 https://www.mhlw.go.jp/shingi/2004/12/s1224-17.html (2020 年 7 月 2 日現在)

厚生労働省(2014a)「認知症施策の現状について」 https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000065682.pdf (2020 年 7 月 2 日現在)

厚生労働省(2014b)「平成 24-25 年度認知症者の生活実態調査結果(抜粋)」 https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000048005.pdf (2020 年 7 月 2 日現在)

厚生労働省(2015)「認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)」 https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/nop1-2_3.pdf (2020 年 7 月 2 日現在)

厚生労働省(編)(2016)「平成 28 年版厚生労働白書」 https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/16/dl/1-01.pdf (2020 年 7 月 2 日現在)

厚生労働省(2017)「平成 29 年版高齢社会白書(概要版)3 高齢者の健康・福祉」 https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/gaiyou/s1_2_3.html (2020 年 7 月 2 日現在)

厚生労働省「みんなのメンタルヘルス総合サイト　認知症」 https://www.mhlw.go.jp/kokoro/speciality/detail_recog.html (2020 年 1 月 2 日現在)

小松洋平・上城憲司・青山宏(2010)「地域住民が持つ認知症に対するイメージの実態と構造ー自由回答アンケートの分析ー」Yanagawariha Fukuokakokusai Kiyo Vol.6,pp.21-26
柴田雄企(2006)「認知症高齢者に対する知識とーイメージ 女性介護職員と短期大学女子学生の比較ー」大分県立芸術文化短期大学研究紀要 45,pp.21-28
丹野智文(2017)「笑顔で生きる」文藝春秋
高橋智(2011)「認知症の BPSD」日老医誌 48,pp.195-204
東京都医学総合研究所(2013)「認知症政策の個別課題に関する集中協議報告」http://www.igakuken.or.jp/mental-health/dementiasymposium/research/gakujutsu_syukai/g_syukai130129/pdf/04.pdf (2020 年 7 月 2 日現在)
西山沙百合・荒井佐和子・瀧川真也(2018)「認知症の症状および介護に関する知識と認知症高齢者イメージとの関連」川崎医療福祉学会誌 Vol.28,No.1,pp.231-239
野村信威(2001)「老年期における回想の質と適応との関連」発達心理学研究第 12 巻,第 2 号,pp.75-86
山田光子(2015)「統合失調症患者のセルフスティグマが自尊感情に与える影響」日本看護研究会雑誌 Vol.38,pp.85-91
World Alzheimer Report 2015(2015): The Global Impact of Dementia https://www.alz.co.uk/research/world-report-2015 (2020 年 7 月 2 日現在)
World Alzheimer Report 2012(2012): Overcoming the stigma of dementia https://www.alz.co.uk/research/WorldAlzheimerReport2012.pdf (2020 年 7 月 2 日現在)